様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月　 ２ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０３１５２

研究課題名（和文）考古遺跡を発掘調査終了後に地域の文化資源として活用する方法論の検討

研究課題名（英文）Methods and methodology for utilising an archaeological site after excavation as cultural resources of the local community

研究代表者
松田　陽（MATSUDA, Akira）

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・准教授

研究者番号：００７７１８６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：東京大学を中心とした調査団が行うイタリアのソンマ・ヴェスヴィアーナに所在する通称「アウグストゥスの別荘（Villa di Augusto）」遺跡の発掘調査に即した実践研究を推進し、地元住民および遺跡の利害関係者が同遺跡に何を望んでいるのか、また望んでいないのかを社会調査を通して解析した上で、発掘調査途中にある考古遺跡を調査終了後に地域の文化資源として活用するための方法論を実験的に構築・提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的・社会的意義は、①発掘調査終了後からある程度時間が経過した遺跡の活用を探るのではなく、発掘調査が進行中の段階から調査終了後の遺跡活用の方策を探った点、また、②その方策を一般化し、多くの発掘調査中の遺跡に適用できる遺跡の文化資源化の方法論として提示した点に見出だせる。いまだ発掘調査中の段階において、遺跡を調査終了後にどのように活用するかを社会科学的に考査した研究は世界的にも存在せず、その意味において本研究はパブリックアーケオロジーの新たな領域を切り拓くことに貢献したと言える。

研究成果の概要（英文）：This research project explored methods and methodology for utilising an archaeological site as cultural resources of the local community, building on the excavation of the so-called "Villa of Augustus (Villa di Augusto)" in Somma Vesuviana, Italy, led by a team from the University of Tokyo.

研究分野：文化遺産研究

キーワード：パブリックアーケオロジー　文化遺産研究　埋蔵文化財　文化資源　考古学　発掘調査　ソンマ・ヴェスヴィアーナ　「アウグストゥスの別荘」遺跡

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

考古遺跡の活用に関しては、文化遺産研究やパブリックアーケオロジー研究などの領域で長年議論と考察が行われてきており、一定の研究の蓄積があるものの（奈良文化財研究所 2007、2008、2009、2010、2011『遺跡整備・活用研究集会報告書』、澤村明 2010『文化遺産と地域経済』等）、まだ発展させるべき点が二つある。一つ目は、遺跡の活用がこれまではもっぱら実務的な課題として捉えられ、社会科学的な省察とは離れた次元で検討されてきた点である。これは例えば、「親しみやすい遺跡」や「地域に根づいた遺跡」といった言葉が、それが何を意味するのかが明確でないままに安易に使われている現状に端的に表れている。人々にとって親しみやすい遺跡、あるいは地域に根づいた遺跡とは、厳密に言えばどのような遺跡であるのか、そしてどのような理由からその状況が望ましいのかを社会科学的に解明、説明した上で、遺跡活用の実践を考査する必要がある。

二つ目は、遺跡の活用に関する議論の大半が、発掘調査終了後からある程度時間が経過した遺跡に改めて社会的価値を付与することを前提にしているという点である。地域において未活用の状態で眠る遺跡を活用していこうとする議論や研究の意義を否定する余地はもちろんない。しかし、発掘調査が進行中の段階から調査終了後の遺跡活用の方策を探ることは、早期の段階での計画作成を促し、かつ、遺跡の調査から文化資源化までの一連の流れを円滑にし、地域の関心に沿った遺跡を実現する可能性を高める。それはすなわち、より深化した遺跡活用の方法論の確立につながる。

２．研究の目的

上に示した二点の問題意識にもとづき、本研究では発掘調査途中にある考古遺跡を対象として、調査終了後に地域の文化資源として活用するための方策を検討した。そのための中心的な考察対象としたのは、東京大学を中心とした調査団が 2002 年から行っているイタリアのソンマ・ヴェスヴィアーナの通称「アウグストゥスの別荘」遺跡の発掘調査である。

「アウグストゥスの別荘」遺跡はローマ時代末期にヴェスヴィオ山の噴火で埋没したもので、1930 年代に再発見、発掘調査された際に、初代皇帝アウグストゥスが死去した建物だと考えられ、以後、「アウグストゥスの別荘」の通称で呼ばれるようになった（D’Avino 1979『La reale villa di Augusto in Somma Vesuviana』）。1930 年代の発掘調査は資金不足のために中断を余儀なくされ、それ以降、2002 年に東京大学を中心とした発掘調査団が発掘を再開するまで、遺跡は 65 年間以上地中に埋もれたままとなっていた。今日も継続中の発掘調査には、考古学、美術史学、西洋史学、火山学、地理学、植物学等さまざまな分野の研究者が参加し、世界的に評価される学術成果を数多く生み出している（Aoyagi, Angelelli and Matsuyama 2010「La cd. Villa di Augusto a Somma Vesuviana alla luce delle più recenti ricerche archeologiche」等）。一方、社会的なインパクトとしては、大規模かつ豪華な建造物の遺構群、ペプロフォロス像とディオニュソス像の大理石製彫刻、ギリシア神話の世界を描いた美麗な彩色壁画などの出土にともなって、地元ならびにイタリア国内では同遺跡の活用に対する期待が高まっている。

現行の発掘調査は近い将来終了する予定となっており、その後、遺跡はソンマ・ヴェスヴィアーナの町やイタリア政府の管理下で遺跡公園として公開され、発掘から出土した遺物は地元の教会の一部を資料館に改装した場所に収蔵・展示される予定となっているが、その具体的な内容の協議は始まったばかりである。ソンマ・ヴェスヴィアーナの町は、この協議にあたって数次にわたり発掘調査団に協力の要請を表明してきた。

「アウグストゥスの別荘」遺跡の発掘調査が収束に向かいつつある現在、地域住民および遺跡のステークホルダーが遺跡および出土遺物の取り扱いに関して抱く感情・見解を精緻に理解・分析することは、遺跡公園・資料館の開設へのプロセスの最適化に貢献する。そしてその際に、一般的に行政等が実施するパブリックコメントのような定型化した調査ではなく、最新の社会科学理論に基づいた社会調査を行うことによって、遺跡を文化資源化する意味と意義を学術的に解明できるという利点がある。それはすなわち、他の地域における発掘調査中の遺跡も適用できる「遺跡の文化資源化の方法論」の確立を可能にする。

３．研究の方法

以上の研究目的を達成すべく、①遺跡活用に関する先行研究の整理、②考古系文化財の取り扱いならびに土地利用に関するイタリアの現行法およびカンパニア州条例の解明、③ソンマ・ヴェスヴィアーナの地域社会との関係においての「アウグストゥスの別荘」遺跡の発掘調査の現状と社会的課題の解明、④同遺跡のステークホルダーの特定と分析、⑤同遺跡とソンマ・ヴェスヴィアーナの住民との関係の分析、⑥カンパニア州における考古遺産の活用状況の分析、という六つの領域における研究調査を遂行した。それぞれの領域で採用した方法論は以下の通り。

①②⑥：関連文献と法規の特定および精査。
③：「アウグストゥスの別荘」遺跡発掘調査の関係者およびステークホルダーからの聴取調査。
③④⑤：ソンマ・ヴェスヴィアーナの住民ならびに「アウグストゥスの別荘」遺跡への訪問者を対象とした質問表調査から収集したデータを量的ならびに質的に分析。遺跡のステークホルダーおよび遺跡訪問者を対象とした面接調査から収集したデータを質的に分析。ソンマ・ヴェスヴィアーナの住民が「アウグストゥスの別荘」遺跡ならびにその発掘調査にどのように関わるかを

特定することを主眼としたエスノグラフィー。
⑥：遺跡・博物館を訪問の上、現状確認および関係者から聴取調査。

４．研究成果
　上に示した方法に基づく研究調査を実施し、発掘調査途中にある考古遺跡を調査終了後に地域の文化資源として活用するための方法論を実験的に構築･提示した。研究成果の発信としては、以下の論文出版と口頭発表を行った。

2016 年度
Matsuda, A. 2016. ‘A Consideration of Public Archaeology Theories’, *Public Archaeology 15(1): 40-49, DOI: 10.1080/14655187.2016.1209377.*査読あり。

2017 年 2 月にフィレンツェにて開催されたパブリックアーケオロジーに関する円卓会議（L’archeologia italiana è res… publica?）にて口頭発表「A view from afar on public archaeology in Italy」を行った。

2017 年度
2017 年 6 月にフィンランドのタンペレで開催された考古遺跡マネジメントのワークショップ「Working-conference: Development and Best Practices of (archaeological) Heritage Management as a Course」にてセッション座長を務め、かつ発表を行った。

2017 年 9 月にオランダのマーストリヒトで開催された欧州考古学会（European Association of Archaeologists）の年次大会にて Mark Oldham 氏と共同でセッション「Bridging theoretical and practical divides in public archaeology」の座長を務め、口頭発表「Public archaeology, economy, and the role of expertise in 2017」を行った。査読あり。

2018 年度
2018 年 4 月にイタリアのテンノで開催されたワークショップ「Participatory Research in Archaeology」（パドヴァ大学とアルト・ガルダ博物館による共同開催）に講師として参加し、口頭発表「Action research in public archaeology: a case study of an excavation in Somma Vesuviana」を行った。

2018 年 7 月に文化遺産国際協力コンソーシアムが開催した研究会「諸外国における文化遺産保護の支援と協力を知る・語る」にてイタリアに関する議論のファシリテーターを務めた。

2019 年 2 月に東京大学大学院総合文化研究科グローバル地域研究機構地中海地域研究部門が主催した研究発表会「火山噴罹災地の文化・自然環境復元―2017/2018―」にて口頭発表「ソンマ発掘調査の記録と記憶のアーカイブ化」を行った。

2019 年度
Matsuda, A. 2019. ‘A Consideration of Public Archaeology Theories’, *Public Archaeology: Theoretical Approaches and Current Practices*, London: British Institute at Ankara, pp.13-19. ISBN: 978-1912090808.査読あり。

学術雑誌『Amoenitas』第 8 号に掲載するための論文「Public archaeology at the so-called “Villa of Augustus” in Somma Vesuviana」を執筆した（約 7100 語）。アクセプト済みで、2020 年 9-10 月に出版予定。『Amoenitas』はイタリアの大学・研究機関評価国立機構（l'Agenzia nazionale di valutazione del sistema universitario e della ricerca (ANVUR) が認定する学術雑誌（カテゴリー：エリア 10）。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 Matsuda, Akira	４．巻 1
２．論文標題 A Consideration of Public Archaeology Theories	５．発行年 2017年
３．雑誌名 Public Archaeology	６．最初と最後の頁 40-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/14655187.2016.1209377	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　3件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 松田陽
２．発表標題 ソンマ発掘調査の記録と記憶のアーカイブ化
３．学会等名 研究発表会「火山噴罹災地の文化・自然環境復元―2017/2018―」（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Akira Matsuda
２．発表標題 Action research in public archaeology
３．学会等名 研究ワークショップ「Participatory Research in Archaeology」（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 松田陽
２．発表標題 イタリアの事例
３．学会等名 文化遺産国際協力コンソーシアム研究会「諸外国における文化遺産保護の支援と協力を知る・語る」
４．発表年 2018年

１．発表者名 Akira Matsuda
２．発表標題 Public archaeology, economy, and the role of expertise in 2017
３．学会等名 European Association of Archaeologists 2018 Maastricht（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Akira Matsuda
２．発表標題 Research on heritage on the transnational level
３．学会等名 Working-conference: Development and Best Practices of Archaeological Heritage Management as a Course（招待講演）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計1件

１．著者名 Akira Matsuda	４．発行年 2019年
２．出版社 British Institute at Ankara	５．総ページ数 102
３．書名 Public Archaeology: Theoretical Approaches and Current Practices（分担執筆、pp.13-19）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考